L2T

本科１期７月度

解答

Ｚ会東大進学教室

# 高２難関大国語

# 11章

## 【問題】（演習）

出典…『徒然草』／中央大学　04年・改

### 現代語訳

粗末な竹の編戸の中から、たいそう若い男が、月の光（のもと）で色調ははっきりしないけれども、つやつやした狩衣に、濃い（紫色の）指貫姿で、たいそう由緒ありそうな様子で、小さな召使いの子供一人を連れて、はるかに続く田の中の細道を、稲の露に濡れながら分け進んで行く間、（その男が）笛を何ともいえないほど趣深く吹き興じている音色を、情趣のあることだと聞きわけられる人もいないだろうと思うにつけても、（私はその男の）行く先が知りたくて見守りながら（ついて）行くと、（男は）笛を吹くのをやめて、山のそばに正門のある邸の中に入った。（轅（ながえ）を）榻に立てている牛車が見える様子も、都（で見る）よりは目につく気持ちがして、（その邸の）召使いに尋ねると、「何某の宮様がいらしている時分で、御法事などがございますのでしょうか」と言う。

御堂の方に僧侶たちが参上している。夜寒の風に誘われ〔＝のって〕ただよってくる空薫き〔＝どこからともなく匂う〕香のかおりも、身にしみる気持ちがする。寝殿から御堂への廊下に往来する女房の香のかおり〔＝通った後によいかおりがするように予め香を衣に焚き染める嗜（たしな）み〕など、人の訪れもない山里にもかかわらず、心配りをしている。思いのままに〔＝茂り放題に〕茂っている秋の野原（のような庭）は、置ききれないほどの露にうずもれて、虫の声は恨み嘆いているように聞こえ、遣水の音は穏やかだ。都の空よりは、雲の往来も早い気がして、月が照ったり曇ったりすることも（絶えることなく変化して）定まらない。

### 解答

問1　A＝かりぎぬ　B＝さしぬき　C＝わらわ　D＝しじ　E＝やりみず

問2
a＝(ア)
b＝(カ)
c＝(ア)

問3
え

問4
(ア)

問5
恨み嘆いているようで

問6
(エ)

## 【問題】（自習）

出典…『徒然草』第四十一段の全文　／　大阪経済大学・改

**現代語訳**

五月五日、賀茂神社の競馬を見物しましたおり、（私たちの乗った）牛車の前に見物の群衆が立ちふさがって（競馬が）見えなかったので、めいめい車からおりて、馬場の柵のそばに寄って行ったが、（そこは）特に人がおおぜい雑踏していて、押し分けて入っていけそうにもない。

こうした時に、向こう側の棟の木に、法師で、登って木の股に腰をかけて見物している者が、いる。（木に）つかまったまま、すっかり眠りこけて、今にも落ちそうになっては目をさますことがたびたびである。この様子を見る人たちが馬鹿にしてあきれて、「とんでもないばか者だなあ。こんなにあぶない枝の上で安心して眠っているようだよ（全く気がしれないね）」と言うので、私の心にふと思い浮かんだままに、「我々の死期がやって来ることも、今すぐであるかもしれない。そのことを忘れて、見物なんかして一日を暮らしている。その愚かなことは（あの僧）以上であるのになあ」と言ったところ、前にいる人たちが、「ほんとうにそのとおりでございますよ。（私たちこそ）一番愚かでございます」と言って、みなうしろを振り返って見て、「さあ、ここへおはいりなさい」と言って、場所をあけて（私を）呼び入れてくれたのでした。

これくらいの道理は、誰が思いつかないだろうか、誰だって思いつくに違いないことだけれども、（のんきな競馬見物という）場合が場合であったから、思いがけない（ことを言われたような）気がして、胸にこたえたのであろうか。人間は木や石（のような非情の物）ではないのだから、時によって、物に感じることがないわけではない。

**解答**

問1　(1)＝(ウ)　(2)＝(イ)

問2　①　甲＝(エ)　乙＝(ア)　②　甲＝(コ)　乙＝(オ)　③　甲＝(イ)　乙＝(エ)　④　甲＝(オ)　乙＝(エ)　⑤　甲＝(ク)　乙＝(イ)

**問3** ①＝我々が、自分の死期が迫っているかもしれないことに気付かず、競馬などを見物して毎日を送っている様子〔解答例〕
②＝(ウ)

**問4** (ウ)

**問5** (a)＝(ア)　(b)＝(エ)　(c)＝(エ)

## 解説

**問1** 古語の知識を問う問題。

(1)の「あさむ」は、形容詞「浅し」の語幹に、接尾語「む」の付いた形。この接尾語は、形容詞を「～のような状態になる・～のようにふるまう」という意の動詞にする。ここでは、「法師」を見る気持ちが「『浅い』という状態になる」のだから、「あきれる・あなどる・ばかにする」という意味になる。

(2)の「しれ者」は漢字で書けば「痴れ者」。「ばか者」という意味。

**問2** ①の終止形は「見ゆ」。下に打消の助動詞「ず」の連用形が付いているので未然形。

②は、文節の中で「ざり」という助動詞に続いているから、自立語ではない。ここでは助動詞。助詞「ば」に付いていることから、已然形か未然形であるが、已然形か未然形がこの形になる助動詞は、過去を表す「き」の已然形である。

③について。「見る、あり」という形になっている。「見る」はここでは「あり」の主語となり、名詞に準じた使われ方をしている。準体法を持つのは連体形。「見る」は、即座に上一段動詞と判断できるはず。

④について。終止形「安し」。形容詞で、未然形は「安から」となるからク活用。そして下に「心」が接続しているので、連体形。

⑤について。「にや」という形で言い切って、下に付くはずの「あらむ」などを省略した形で文末にあるものは、断定の助動詞「なり」の連用形＋疑問の係助詞「や」である。

**問3**　①　傍線部(3)の直前に、「暮す、」とあるのに着目しよう。「暮す」は四段活用だが、終止形の下に読点が付けられることはないので、この「暮す」は連体形と考えられる。「連体形」の直下に読点「、」があるのだから、これは、「準体法」とみて良いだろう。「準体法」だから、直下に「こと」を補うことができ、「暮すこと」と「愚かなること～まさりたる」との関係を考えれば、「暮すこと」が「愚かなること～まさりたる」だと考えられる。したがって、「暮す」、そして「暮す」につながる行為すべて、「それを忘れて、物見て日を暮す」という様子が、「愚かなること～まさりたる」なのだと判断できる。ここには「それ」という指示語が含まれているが、この指示内容は、さらに上の「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。」が相当しよう。ここに「我等」が出てくるので、これが、「誰が」に相当する部分である。したがって、「我等が生死の到来、～物見て暮す」という部分をまとめればよい。

②　傍線部(3)という言葉は、その前の「これを見る人、あざけりあさみて、『世のしれ者かな。～睡るらんよ』と言ふ」という行為に対して発せられたものである。ここで、『世のしれ者かな。～』と言われている「これ」とは、本文3～4行目の「向ひなる棟の木に～度々なり」を指している。したがって、「誰より」は、ウ「法師」のこと。つまり、傍線部(3)を含む一文では、「我等が生死の到来、～物見て日を暮す」ことが、「かく危き枝の上にて、安き心ありて睡る」法師の様子に比べて、その「愚かなることはなほまさりたる」と言っているのである。

**問4**　「折から」＝折柄＝丁度その時。その上に、「かほどの～思ひよらざらん」とあり、筆者や他のギャラリーたちが強く感じたことは、ふだんなら誰でも考えつくことであるとわかる。なのに、その時（＝折から）に限って「思ひかけぬ～あたりける」なのだから、その折が特別であったことがわかる。その日の、他の日との特異点は、「賀茂の競べ馬」があったことである。

**問5**　傍線部(a)・(b)では、「ぬべき」の意味の識別がポイントとなっている。

(a)について。「ぬ」は、「入り」という動詞の連用形に続いているから、完了の助動詞。完了の助動詞が「べし」「む」などの推量系の助動詞に接続している場合は、「べし」や「む」などの意味を強める強調（確述）の意味を表す。「べき」は、ここでは、「なし」という否定を表す語とともに用いられていることに着目しよう。「べし」は、打消の助動詞「ず」や打消の接続助詞「で」、否定を表す語とともに用いられて、「～できない」という不可能の意味を表すことが多い。ここでもまず、その原則をあてはめて

みると、「分け入ることのできる様子はない」と解釈できる。これは、(a)の直前に書かれている「ことに人多く立ちこみて、」という状況と矛盾しない。

(b)について。「ぬ」は「落ち」という動詞の連用形に続いているから、やはり、強調の意味を表す。「べし」の意味だが、選択肢の中で該当するのは、(エ)の「～そうになる」しかない。後の選択肢の解釈は、助動詞「べし」の表す意味からはずれすぎている。

(c)について。これは、「木石」は何の比喩として使われているのかを問うている。それを探るためのヒントは、傍線部(c)の直後の「時にとりて、物に感ずることなきにあらず」の部分である。つまり、「心」が「物に感ずる」と述べている。よって「木石」は、「物に感ずることのない」「心がない」ものの例えである。したがって正解は(エ)。

## 【問題】（自習）

### 《補充問題》

**現代語訳**

**問1**
(1) 少納言よ、直衣を着ている（という）方はどちらに（いるのか）。
(2) 恋しく思って寝るので、恋人が（私の夢に）現れるのだろうか。夢だとわかっていたら、目覚めずにいたものを。
(3) 小督殿は、すぐに返事をしようとお思いになったであろうが、手に取ってご覧にさえもならない。

**問2**
(1) 空を遠くはるかに見渡すと（東に見えるこの月は、かつて故郷の）春日にある三笠の山に出た月であるなあ。
(2) 今は亡くなった人なので、これほどの（ささいな）ことも忘れがたい。

**解答**

**問1**
(1) 現在の伝聞（婉曲）・連体形
(2) 現在の原因推量・連体形
(3) 過去推量・已然形

**問2**
(1) 春日にある三笠の山
(2) 今は亡くなった人なので

●メモ●

# 12章

## 【問題】（演習）

出典…清・銭泳『履園叢話』「臆論」／お茶の水女子大学　95年・改

### 書き下し文

銀銭は一物、原より少なかるべからず、亦多かるべからず、多ければ則ち運用するに難く、少なければ則ち進取するに難し。蓋し運用には心を縈すを要し、進取にも亦心を縈すを要す、此に従りて一生労碌し、日夜安からず、而して人も亦之に随ひて衰憊す。須らく多からず少なからざるを要すべし、又能く足るを知りて撙節し、以て之を経理すれば、則ち綽綽然として余裕有り。余年六十にして、尚ほ二毛無く、称羨せざるは無く、以て必ずや養生の訣有らんと為す。一日、余一富翁一寒士と与に坐して談ず、両人の年紀は皆未だ五十を過ぎざるに、倶に鬚髪蒼然、精神衰へたり。因りて余に修養の法を問ふ、余笑ひて答へず、別れて後に人に謂ひて曰はく、「銀銭は怪物、人をして髪白からしむ」と。其の一は太だ多く、一は太だ少きを言ふなり。

### 現代語訳

金銭というものは物の一つであり、もともと少なくてもよくないし、また多くてもよくない。多いと使い方が難しく、少ないと積極的に物事をすることが難しい。思うに、（多い金銭の）使い方には心を悩ますことが必要であり、（少ない金銭で）積極的に物事をするのも心を悩ますことが必要である。そのために一生あくせく苦労し、昼も夜も落ちつかず、そして人もまたこのために疲れはててしまう。（だから金銭は）多くもなく少なくもないということが大切であり、また十分であると考えて節約し、金銭を取り扱えば、気持ちが落ちつきゆとりが出てくる。私は六十歳であるが、白髪まじりの髪の毛がないので、（私のことを）ほめたたえ、うらやまない者はなく〔＝誰もがみな私をほめたたえてうらやましがり〕、きっと（その若さを保つ）健康の秘訣があるのだろうと思っている。ある日、私は一人の金持ちと一人の貧乏人と一緒に話をしたが、二人の年齢はまだ五十歳を過ぎていないのに、どちらもそろってあごひげと頭

髪が白く、気力も衰えていた。それで（二人は）私に健康を保ち気力を張って生きていく方法を尋ねたが、私は笑って答えず、別れた後で人に語った、「金銭とは不思議なもので、人の髪を白くさせてしまう」と。（その理由の）一つは多く持ちすぎることで、一つは少なすぎることである。

**解答**

**問1** (a)＝けだ（し）　(c)＝よ（りて）

**問2** ある日

**問3** (エ)

**問4** (2)＝すべからくおほからずすくなからざるをようすべし、（すべからくおおからずすくなからざるをようすべし、）

(4)＝いまだごじゅうをすぎざるに、

**問5** 世間の人々は、私のことをほめたたえ、うらやまない者はなく、〔解答例〕

**問6** **冒頭**＝須要　**末尾**＝理之（3行目）

## 【問題】（自習）

出典…『古文真宝』「古硯銘」　／　上智大学　97年

### 書き下し文

硯と筆墨とは、蓋し気類なり。出処も相近く、任用寵遇も相近きなり。独り寿夭相近からざるなり。筆の寿は日を以て計へ、墨の寿は月を以て計へ、硯の寿は世を以て計ふ。其の故は何ぞや。其の体たるや、筆は最も鋭く墨之に次ぐ。硯は鈍者なり。豈に鈍者は寿にして鋭者は夭に非ざらんや。其の用たるや、筆は最も動き墨之に次ぐ。硯は静者なり。豈に静者は寿にして動者は夭に非ざらんや。吾是に於いて生を養ふを得たり。鈍を以て体と為し、静を以て用と為さん。或ひと曰く、寿夭は数なり。鈍鋭動静の制する所に非ずと。借令筆鋭からず動かずとも、吾其の硯と与に久遠なる能はざらんことを知るなり。然りと雖も、寧ろ此を為し、彼を為すこと勿かれ。銘に曰く、鋭きこと能はず。因りて鈍きを以て体と為す。動くこと能はず。因りて静かなるを以て用と為す。惟だ其れ然り。是を以て能く永年なりと。

### 現代語訳

硯と筆・墨とは、思うに同類である。（それが必要とされ作られた）由来も互いに類似し、用いられ方や（人に）気に入られ大事にされる点でも互いに似ている。ただ長持ちするかしないかだけがそれぞれ違っている。筆の寿命は日にちで〔＝日単位で〕数え、墨の寿命は月で〔＝月単位で〕数え、硯の寿命は世代で〔＝家系の何代単位で〕数える。その理由〔＝筆・墨・硯の寿命が違う理由〕は何だろうか。その実体は〔＝それぞれの実体についていえば〕、筆は最も鋭く墨がその次である〔＝墨が次いで鋭い〕。硯は鈍いものである。どうして鈍いものの寿命が長くなく、鋭いものの寿命が短くないだろうか〔＝鈍いもののほうが鋭いものより寿命が長いのである〕。その作用は〔＝それぞれの使われ方・動き方についていえば〕、筆は最も動き（が激しく）墨がその次である〔＝墨が次いでよく動く〕。硯は静かな〔＝動かない〕ものである。どうして静かなものの寿命が長くなく、動くものの寿命が短くないだろうか〔＝動かないもののほうが動くものより寿命が長いのである〕。私はそこで養生〔＝長生きの秘訣〕を理解した。鈍いことを（自らの）実質とし、静かなことを（自らの）作用〔＝行動原理〕としようと。（すると）ある人が言う、「長生きするか若死にするかは運命である。鈍

いか鋭いか、動くか動かないかが決めることではない」（理屈としてはそれがもっともなことで）たとえ筆が鋭くなく動かないとしても、私だってそれが硯同様に長い寿命を保つことはできないことぐらい知っている。（それは）その通りであるけれども、やはりこの〔＝硯と同様鈍く、動かないこと〕ようでいることを心がけ、あの〔＝筆のように鋭く、動きまわること〕ようにはしないことにしたい。（よってこの硯に）銘文（を成してそれ）に言う。鋭くあることはできない。そこで鈍いことを実体とする。動くこともできない。そこで静かなことを在り様とする。ただそれで（自ら納得して）そのようでいる。だから長く用いられることができるのであると。

**解答**

問1　(ア)＝けだし　　(イ)＝かぞえ　　(ウ)＝むしろ

問2　A＝ただ長持ちするかしないかだけがそれぞれ違うのである。〔解答例〕
B＝どうして鈍いものの寿命が長くなく、鋭いものの寿命が短くないだろうか、いや、鈍いものの寿命は長く、鋭いものの寿命は短いのである。〔解答例〕

問3　a

問4　d

問5　硯

## 解説

**問1**　基本的な読み（字義）の設問だが、語順による判断も必要である。

(ア)「蓋」この字は「ふた」という名詞としての訓もあるが、それでは意味が通じない。直後の「気類也（同類である）」が述語句であることに気付けば、副詞の位置にあることがわかるはず。この字が副詞として機能している場合、「けだし」と読んで、続く内容が推量であることを示す。なお、「蓋」は副詞・疑問詞の位置にある場合「盍」と同様再読文字として「なんぞ～ざる」と読むこともあるが、この場合は意味が通じない。

(イ)「計」意味は字を見ての通り「計算」などの熟語でなんとなくわかるが、直前に「以A」を伴う点から述語動詞である。(イ)を含む「筆之寿以日計」の部分が続く「墨之寿以月計」「硯之寿以世計」と対句（正確には三句以上の対応なので「類句」）になっている。「墨」の部分は「計へ」、「硯」の部分は「計フ」と送り仮名がある点から見て、ハ行で活用する動詞である。いうまでもなく「かぞふ（数ふ）」で、あとは(イ)の部分が日本語では連用中止法になる（つまり連用形になる）点だけ気をつければよい。

(ウ)「寧」これも多義語である。「やすし（やすらかなり）」「やすんず」「なんぞ」「いづくんぞ」「むしろ」など、さまざまな読み（意味）が考えられるが、これも語順に注意。直後の「為」が述語動詞であるのだから、副詞「なんぞ」「いづくんぞ」接続詞「むしろ」が候補となる。この前後の構文が「寧為此」「勿為彼」が対応関係になっていることに気付けば難しくはない。「寧A、勿（無）B」――寧ろA（す）とも、B（すること）勿れ、B（する）よりもA（する）ほうがよい――の構文である。出題者の付した送り仮名は、必ずしもこの通りではないが、語順・構文の点から「むしろ」と読むと判断できる。

**問2**　現代語訳（口語訳）の設問の場合、まず前後の文脈を見直し、それを前提に考えること。

**A**　傍線部Aの前の部分が、硯と筆・墨とを「相近」と、その共通点・類似点を述べているということをまず押さえる。それを前提に傍線部分を見れば、「不相近」と、ここでは相違点を述べていることがすぐわかる。直後「筆之寿～、墨之寿～、硯之寿～」とそれぞれの「寿」についての説明があり、その内容、さらに「寿」を用いた熟語の知識（たとえば「寿命」など）から、ここでは硯・筆・墨の寿命が違うことを言っていると当たりをつけるのは容易であろう。あとは「訳」を要求されているので、傍線部分の語・表現を丁寧に見てゆけばよい。「寿夭」は「寿」と「夭」が組み合わさった表現だが、これが対義語である点に注意。「夭」は「夭逝」という熟語があるように「早死に」「若死に」の義をもつ語。「寿」のほうについては、たんに「寿命」という熟語の日本

語での意味を考えるだけでは勘違いをするかもしれない。「長寿」「寿福」などの熟語でもこの字が用いられているように、この字にはもともと「長命」「長生き」の義がある。したがって「寿夭」は「長生きすることと早死に（若死に）すること」という意味である。「独」（ひとり）は「惟」「唯」（ただ）・「讒」（わづかに）などと同様、（普通は訓読の際に「〜のみ」と副助詞「のみ」を伴って）限定の意で用いられる字。この場合のポイントは「何を限定しているか」で、「寿夭」を限定しているのか、「不相近」を限定しているのかの判断である。傍線部の前の部分の内容が共通点・類似点を言っているということ、傍線部分以降が「不相近」相違点の具体的な説明であること（つまりこの文では相違点のほうにより重点があること）、以上の点から「寿夭」を限定していると判断する。「不相近」を限定していると考えると、「〜が違うだけ」と、むしろ共通点・類似点のほうに重点を置いた叙述になってしまう。「相」は述語の前で副詞として機能し、「たがいに」「相手を」という意味になる。以上の点を押さえて訳してゆく。

**B**　まず「豈〜乎」の反語の形であることを押さえる。次に注目すべきは「而」で、接続詞として述語と述語を順接あるいは逆接でつなげる語。言い換えれば、この場合「鈍者寿」と「鋭者夭」がそれぞれ文として成立しているということ。すると、傍線部二文字目の「非」は構文上「鈍者寿」「鋭者夭」をそれぞれ否定しているということになる。つまり「鈍いものは長生きではない」と「鋭いものは早死にではない」を反語の形で括っていることになり、したがって本文の傍線部分で「非」は一箇所だけだが、訳文では「鈍者寿」「鋭者夭」それぞれを「ではない」と否定して、それを反語の表現にしないと意味が変わってしまうことに注意が必要である。

**問3**　選択肢に並んでいる熟語に関する知識があれば簡単な問題。

**a**「命数」は「めぐり合わせ・運命」などの意。

**b**「度数」は単純に「かず」の意。

**c**「術数」は「謀りごと・企み」の意。

**d**「暦数」は「暦の計算」の意。

傍線部①は「寿夭数也」のところにあるので、「長生きと短命は」何だと言っているのか、と考えれば**a**「命数」を選ぶのに苦労はしないだろう。選択肢に並んでいる熟語は一般的なものばかりなので、この程度の知識は持っていたい。

**問4**　すでに**問1**(ウ)のところで説明したように、傍線部分を含む「寧為此、勿為彼」は「寧A、勿（無）B」で、「BするよりもAするほうがよい」という意味になるのだから、傍線部「彼」は筆者が「しないほうがよい」と考えている事柄である。さらにこの一文が「雖然（しかりといへども―そうではあるけれども）」で始まっていることにも注意。つまり前の部分と逆接で「彼」より「此」をしたほうがよい、と筆者は言っているのである。前の部分の内容をまとめれば、（長寿の秘訣は硯のように鈍く、動かないことだという筆者の考えに対して）「或（あるひと）」の「長生きか短命かは運命であり、鈍いか鋭いか、動くか動かないかによるものではない」という反論を示し、「借令～」で筆者も「それはその通りである」と「或（あるひと）」の言葉を肯定した上で、「雖然」と逆接で設問部分につなげている。したがって筆者が「したほうがよい」と考えているのは「鈍く、動かないこと」で、「しないほうがよい」と考えているのは「鋭く、動くこと」と判断できる。なお、言わずもがなのことではあるが、**a**「筆」、**b**「筆墨」は「する」「しない」の対象にはならない。

**問5**　本文全体の趣旨をとらえていれば難しい問題ではない。「筆（墨）―鋭・動―夭（短命）」「硯―鈍・静―寿（長命）」で、筆者は「養生」の秘訣を「硯」のあり方に見ているというロジック。それがわかっていれば、設問部分が明らかに「硯」のあり方を言っているとわかる。なお、これも言わずもがなのことであるが、「養生」は答えとしては「硯」に劣る。設問部分を含む一文は「銘曰」で始まっていて、「銘」とは調度・碑などに刻んでおくその事物の由来や人の事績などを記した文章のことである。

## 【問題】（自習）

### 《補充問題》

**問1**

① 非レ不レ悪レ寒也。

② 父母之年不レ可レ不レ知也。

**問2**

① どのような草でも枯れないものは無く、どんな木でもしおれないものは無い。

**書き下し文**＝草として死せざるは無く、木として萎えざるは無し。

② 黄鶴は一たび飛び去ってしまうと二度とは帰って来ない。

**書き下し文**＝黄鶴一たび去って復た返らず。

**問3**

①＝(イ)　②＝(エ)　③＝(ア)

① **書き下し文**＝今両虎共に闘はば、其の勢ひ倶には生きざらん。

② **書き下し文**＝天下君の賢を称せざる莫し。

③ **書き下し文**＝吾未だ嘗て見ゆるを得ずんばあらざるなり。

# 13章

## 【問題】（演習）

出典…沈括『夢溪筆談』／東北大学

### 書き下し文

錢塘江は、昔時石堤を為り、堤外に又大木十余行を植て、之を湟柱と謂ふ。宝元・康定の間に、人の議を献ずる有り、「湟柱を取らば、良材数十万を得べし」と。杭の帥以て然りと為す。既にして旧木水より出づるに、皆朽敗して用ふべからず、而して湟柱一たび空しく、石堤洪濤の激する所と為り、歳歳決壊す。其の後亦人の説を献ずる有り、「税場以東の数里に月堤を為り、以て怒水を避けん」と。衆の水工以て便なりと為せども、独り一老水工のみ以て然らずと為し、密かに其の党に諭して曰く、「此のごとくせば則ち歳ごとに水患無からん。若が曹何の衣食する所ぞ」と。衆人其の利を楽しみ、乃ち従って之に和す。故に費すに巨万を以てするも、江堤の害仍ほ歳ごとに之有り。近年乃ち月堤を築き、濤害稍稀なり。然れども猶ほ湟柱の利に若かず。然れども湟柱は費す所至りて多く、復た為るべからず。

### 現代語訳

錢塘江では、昔石堤を築き、（その）堤防の外に大木を十数列埋め込んで、これを湟柱と称した。ところが宝元・康定年間に、意見を具申する者がいて、（その意見では）「（堤防の外に埋め込んである）湟柱を掘り出したら、数十万（石）にもなる良い材木を手に入れることができるでしょう」と。杭州の長官はその意見をそのとおりだと考えた。（しかし）やがて湟柱に使った古木を川から抜き取ってみると、どれもみな腐っていて使いものにならなかった。そして一度湟柱がなくなってしまうと、石堤は大波に激突されるようになり、毎年決壊することとなった。其の後また意見を具申する者がいて、（その意見では）「税場から東数里にわたって月堤を築き、それで洪水を避けるようにしたらよい」と。堤防の修復工事を請け負う作業員の多くは（月堤を築くことを）都合のよいことだとした

けれども、一人の年老いた作業員だけは賛成せず、こっそり作業員仲間に教えさとして言うことには、「そんなふうにし（て月堤を作っ）たら、毎年水害がなくなるだろう。（そうなったら）お前たち全員どうやって生活するつもりか」と。多くの作業員たちはその（毎年の河川の氾濫によって行われる堤防の修復工事で得る）収入を望んでいたから、そこでこの（年老いた作業員の）意見に同調した。そのために（月堤は築かれず、）毎年莫大な金額を（堤防の修復に）注ぎ込んだけれども、堤防の決壊はやはり毎年おこった。最近になってやっと月堤を築いたので、水害がいくぶん減少した。そうではあるけれども、やはり、湜柱のあった時の安定さには及ばなかった。しかし、湜柱（を埋め込むに）は費用がたいへん多くかかるので、二度と作ることはできなかった。

**解答**

**問1** やがて湜柱に使った古木を川から抜き取ってみると、それらはすべて腐り果てて使いものにならなかった。

**問2** こうとうのげきするところとなり

**問3** お前たちの仲間はどうやって生活していくのか。

**問4** 毎年決壊する堤防を修復し、絶えることなく生活費を得る利。〔28字・解答例〕

**問5** 「不復」ならば「二度とつくることができなかった」という意味になり、「復不」ならば「以前も作ることができなかったが、今度もまた作ることはできなかった」という意味になる。〔解答例〕

## 【問題】（自習）

出典…『韓非子』／九州大学　01年　改題

### 書き下し文

荆の恭王、晋の厲公と鄢陵に戦ふ。荆師敗れて、恭王傷つく。酣戦にして、司馬子反渇きて飲を求む。豎穀陽巵酒を奉じて之を進む。子反曰く、之を去れ、此れ酒なりと。豎穀陽曰く、非なりと。子反受けて之を飲む。子反人と為り酒を嗜む。之を甘しとし、之を口に絶つこと能はず。酔ひて臥しぬ。恭王復た戦はんと欲して事を謀り、人をして子反を召さしむ。子反辞するに心疾を以てす。恭王駕して往きて之を視る。幄中に入り、酒の臭を聞ぎ還りて、曰く、今日の戦、寡人親ら傷つく。恃む所の者は司馬なるに、司馬又此のごとし。是れ荆国の社稷を忘れて、吾が衆を恤へざるなり。寡人復た与に戦ふこと無からん。師を罷めて之を去り、子反を斬りて以て大戮と為す。故に曰く、豎穀陽の酒を進むるや、端に子反を悪むを以てするには非ざるなり。実心以て之を忠愛するに、適以て之を殺すに足るのみ。此れ小忠を行ひて大忠を賊ふ者なり。故に曰く、小忠は大忠の賊なりと。若し小忠をして法を行はしめば、則ち必ず将に罪を赦して以て相愛せんとす。是れ下と安んずるなり。然れども民を治むるを妨害する者なり。

### 現代語訳

荆国〔＝楚国〕の恭王は、晋国の厲公と鄢陵（という所）で戦った。荆の軍隊は敗れ、恭王も怪我をした。戦の最中、（荆の将軍）司馬子反が、（喉が）渇いて飲み物を求めた。（そこで）小姓の穀陽が杯に入った酒を捧げて、（子反に）それ〔＝酒〕をすすめた。（持ってきた杯を見た）子反が言うには、「これ〔＝杯〕を（私のそばから）遠ざけよ。これは酒ではないか」と。小姓の穀陽が言うには、「そうではありません」と。（それを聞いた）子反は（杯を）受け取ってそれ〔＝杯の中の酒〕を飲んだ。子反の性格は（元来）酒を好んだ。（いったん酒を飲むと）それを旨いと感じ、杯を口から離すことができなくなった〔＝酒を飲み続けてしまった〕。（結局子反は）酔っ払って寝てしまった。恭王は再び戦をしようと考え計画をし〔＝軍議をしようと思って〕、人をやって子反を呼ばせた。（酔っていた）子反は（呼ばれたのを断るのに）胸が痛いということを理由にした。（そこで）恭王は（自分から）馬車に乗って（子反の所へ）出向き子反の様子を見た。（恭王は子反の）幕舎の中に入り、酒の臭いを嗅ぐと〔＝酒の臭いがするのに気付くと〕そのまま

引き返し、言うには、「今日の戦では、私自身まで怪我をした。（私が）頼りにするのは（将軍の）司馬であるのに、（その上その）司馬までもがこのような体たらくである。これ〔＝司馬のこの態度〕は荆国の国家を忘れ、私の民〔＝荆国の民衆〕のことを考えていないということだ。私は再び（子反と）ともに戦うことはないだろう」と。（恭王は）戦をやめて軍を撤退させ、子反を斬罪に処して大罪を犯したことによる死刑とした。そこで、このように言える。小姓の穀陽が（子反に）酒をすすめたのは、特に子反を憎んで（陥れようと）したのではない。実直な心で子反に忠義を尽くしたことが、たまたま子反を殺す結果となっただけである。これは些末な〔＝つまらぬ〕忠義を行って（かえって）大きな〔＝大事な〕忠義を破ったということである。そこで（また）このように言える。些末な忠義はかえって大きな忠義の敵となる、と。もし些末な忠義（を行う者）に法を司らせれば、必ず罪（ある者）を許してその者に愛情を施すであろう。これは下々の者と馴れ合うことである。しかし（それは）民を治めることを（かえって）妨げることである。

**解答**

**問1** ア＝②　ウ＝④

**問2** イ＝ひととなり
エ＝かくのごとし
オ＝たまたま

**問3** A＝しはんじするにしんしつをもってす。
C＝もししょうちゅうをしてほうをおこなわしめば（おこなわしむれば）、すなわちかならずまさにつみをゆるしてもってそうあいせんとす（あいあいせんとす）。

**問4** (ア)

**問5** 目先の得失にとらわれて法を運用すると、結局は統治の原則をねじ曲げることになるから。〔41字・解答例〕

## 解説

**問1**

**ア**　「荆師敗」の「師」だが、戦争の際の出来事であること、「荆」が国名で、述語動詞が「敗」であることから、「師」は軍隊関係の言葉であると判断するのは難しくない。その点から②「師団」が正解であると判断できよう。なお、「師」には「先生・教え導く人」「人の集まる所・人の集団」「戦・軍隊」などの意があり、選択肢の①・③・④・⑤の「師」は「先生・教え導く人」の意。「人の集まる所・人の集団」の意では「京師」などの熟語がある。

**ウ**　「寡人親傷」で、「寡人（**問4**解説参照）」が主語、「傷」が述語であると判断できれば、設問部「親」は副詞の位置にあることがわかるだろう。この字が副詞として機能している際は、「したしく」「みづから」と訓じ、「自分でじかに」「直接」などの意。選択肢の中でこのような意味で用いられているのは④「親政」である。①「親王」②「親戚」の「親」は「身近な身内」、③「親密」は「したしい（形容詞）」、⑤「親権」は「おや」の意で用いられている。

**問2**

**イ**　「為」人」は「ひととなり」と訓読して「人柄・性格」などの意。

**エ**　「如」此（如」是）」で「かくのごとし」と訓じ、「このようである」が直訳。

**オ**　「適」は直後に述語動詞「足」がある点から副詞の位置にあると判断できる。この字が副詞の位置にあるときは、「たまたま」あるいは「ただ（限定）」と読むのが普通。文末に「而已矣（のみ）」という限定の語があるので、「ただ」と考えてしまうかもしれないが、設問部の前の部分の内容が「豎穀陽之進酒也、非以端悪子反也（小姓の穀陽が子反に酒をすすめたのは、特に子反を憎んでしたことではない）」「実心以忠愛之（実直な心で子反に忠誠を尽くしたことが）」と続いてきていることに注意。その結果が子反を殺すことになった、という文脈から、「たまたま」のほうが適していると判断できる。

**問3**

**A**　「以」がポイント。これは通常前置詞として「以A＋述語動詞（Aを以て〜す）」「以＋述語動詞（以て〜す―目的語・補語のAが省略された形）」と、本来述語動詞の後にある（つまり「述語動詞＋A」の語順になる）目的語・補語を伴って述語動詞の前に持っていくという用法の字。しかし設問部は「以心疾」と、「以」―「心疾（目的語・補語）」の後に述語動詞がない。これは、通常述語動詞の前に位置する「以A」の部分が述語動詞の前に**出なかった**ということと考えればよい。実質上の述語動詞は「辞」で、「以心疾」が「辞」の前に出ず、元の目的語・補語の位置にあるということ。この場合、通常前置詞となる「以」が構文上述語動詞の位置にあり、実質上の述語動詞「辞」が副詞の位置となる点に注意。こういうときは「以」を述語動詞として「もってす」と訓読し、実質上の述語動詞（この場合は「辞」）を「〜するに」と副詞句の形で訓読する。

**C**　設問部分が長いからこそ丁寧に考えてゆくこと。まず「則」に注目。この字は「未然形・已然形＋ば、則ち」と、前に条件接続を伴って続く文を導く機能を果たす。したがって設問部分は「若使小忠行法」と「則必将赦罪以相愛」とに大きく分けることができ、それぞれについて考えてゆけばよい。まず「若使小忠行法」のほうだが、「使（使役動詞）―A（実質動作主）―B（実質上の動作）」の形であることは返り点から容易に判断できる。すると、「使小忠行法」の部分は「小忠をして法を行はしむ」となる。残った「若」は位置的に副詞か助動詞、あるいは主語（名詞）と考えることができるが、返り点から助動詞ではない（助動詞だったら述語動詞から返って読む）。副詞だったら「もし」、主語だったら「なんぢ」という二人称の人称代名詞で、普通に考えて「なんぢ」では意味が通じない。「若」が「もし」という仮定を意味する副詞として機能している点、「若使小忠行法」の次を「則」で受けている点から、この部分の最後に読む動詞「行」は、「おこなはしめば」と順接の仮定条件の形の訓読となる。ただし、漢文訓読では仮定条件の場合でも慣用的に「已然形＋ば」を用いる場合があるので、「おこなはしむれば」でもよい。

「則必将赦罪以相愛」の部分は、再読文字「将」に気付けばそれほど難しくはないだろう。注意すべきはこれが「相愛」から返ってきている点で、再読文字は述語動詞から返って読むのが原則なので、「相愛」の部分は述語動詞である。その前の部分にある「赦罪」の「赦」が、これも返り点から述語動詞と考えられるので、結局「将に〜して〜せんとす」という訓読になる。この点に注意して読んでゆけばよい。ちなみに「相愛」は「相」を動詞「愛」に対する副詞ととらえて（普通はあまり用いられる読み方ではないが）「あいあいす」と読んでもよい。

**問4**　「寡人」は諸侯の自称としてよく用いられる語。「徳の寡（すくな）い人」ということで、謙遜のニュアンスを含む。設問部が恭王の会話文の中にあるので、恭王自身の自称である。会話部分把握は読解の基本中の基本。

**問5**　前提として本文全体の展開をおさえること。恭王と司馬子反の逸話―「故曰（だからこう言える）」で「豎穀陽～賊大忠者也（小姓が気を利かせたつもりでやったことが結果として主人を殺してしまった。これはつまらぬ忠義が大事な忠義を損なってしまったということだ）」―「故曰、小忠大忠之賊也」云々で設問部分につながっている。これを前提に設問部分を検討してゆくことになる。

設問部分「妨害於治民者也（人民を治めることを妨害するものである）」は、直前に「然而（しかれども）」と逆接の接続語を伴っている点を見落とさないようにしたい。逆接の関係になる部分は言うまでもなく直前の「是与下安矣」で、ここにも「是」という指示語がある。「是」が指すのは「若使小忠～以相愛（**問3**解説参照）」で、その直前がすでに触れた「故曰、小忠大忠之賊也」である。つまり「小姓の穀陽の行為」―「小忠」―「罪を赦して愛情を施し、下と安んずる」という対応関係となる。したがって「罪を赦して愛情を施し、下と安んずる」は、結果的に主人を殺すことになった穀陽の行為、「（大忠の敵である）小忠」と対応するのだから、「罰しなければならない罪人を（たとえば情にほだされたり、何かの利害を慮って）赦し、下の者（下々の者）と馴れ合うこと」ぐらいの意味と考えられる。とすると、設問部分「妨害」の主語は「下々の者と馴れ合うこと」であり、「治民」が「大忠」と対応することがわかるだろう。つまり設問部分に言葉を補って解釈すれば、「（情や利害に流されて）下々の者と馴れ合って法を運用していると、（大事な目的である）政治を妨害することになる」ということになる。以上の点を把握できれば、「目先の利害や情に流されて法を運用することが、統治の原則である法を実質的に無効にしてしまう」というのが筆者韓非の主張であることがわかる。表現を変えれば、これがそのまま設問の要求「なぜ妨害することになるのか」の答となる。

## 《補充問題》

**解答**

**問1**

① 使二子路一問レ津。

② 後則為二人所一レ制。

③ 令二将軍一与レ臣有レ郤。

**問2**

① 天帝使三我一長二百獣一。

**通釈**＝天帝が私を百獣の長とさせている。

② 且レ為レ所レ虜。

**通釈**＝今にも捕虜にされようとしている。

③ 獄主未レ信、遣レ人往看。

**通釈**＝監獄の長官はまだ信じられず、人を派遣して確かめさせた。

**問3**

① (ア)＝太守即ち人をして其れに随ひて往かしむ。

(イ)＝太守即ち人を遣はして其れに随ひて往かしむ。

② (ア)＝嘗て楚に遊び、楚の相の辱むる所と為る。

(イ)＝嘗て楚に遊び、楚の相の為に辱めらる。

L2T
高２難関大国語

Z-KAI

| 会員番号 | |
|---|---|

| 氏　名 | |
|---|---|

不許複製